かしわばやしの夜

宮沢賢治

清作は、さあ日暮れだぞ、日暮れだぞと云いながら、稗の根もとにせっせと土をかけていました。

そのときはもう、銅づくりのお日さまが、南の山裾の群青いろをしたとこに落ちて、野はらはへんにさびしくなり、白樺の幹などもなにか粉を噴いているようでした。

いきなり、向うの柏ばやしの方から、まるで調子はずれの途方もない変な声で、

「鬱金しゃっぽのカンカラカンのカアン。」とどなるのがきこえました。

清作はびっくりして顔いろを変え、鍬をなげすてて、

足音をたてないように、そっとそっちへ走って行きました。

ちょうどかしわばやしの前まで来たとき、清作はふいに、うしろからえり首をつかまれました。

びっくりして振りむいてみますと、赤いトルコ帽をかぶり、鼠いろのへんなだぶだぶの着ものを着て、靴をはいた無暗にせいの高い眼のするどい画かきが、ぷんぷん怒って立っていました。

「何というざまをしてあるくんだ。まるで這うようなあんばいだ。鼠のようだ。どうだ、弁解のことばがあるか。」

清作はもちろん弁解のことばなどはありませんでしたし、面倒臭くなったら喧嘩してやろうとおもって、いきなり空を向いて咽喉いっぱい、

「赤いしゃっぽのカンカラカンのカアン。」とどなりました。するとそのせ高の画かきは、にわかに清作の首すじを放して、まるで咆えるような声で笑いだしました。その音は林にこんこんひびいたのです。

「うまい、じつにうまい。どうです、すこし林のなかをあるこうじゃありませんか。そうそう、どちらもまだ挨拶を忘れていた。ぼくからさきにやろう。いいか、いや今晩は、野はらには小さく切った影法師がばら播

きですね、と。ぼくのあいさつはこうだ。わかるかい。こんどは君だよ。えへん、えへん。」と云いながら画かきはまた急に意地悪い顔つきになって、斜(なな)めに上の方から軽べつしたように清作を見おろしました。

清作はすっかりどぎまぎしましたが、ちょうど夕がたでおなかが空(す)いて、雲が団子のように見えていましたからあわてて、

「えっ、今晩は。よいお晩でございます。えっ。お空はこれから銀のきな粉でまぶされます。ごめんなさい。」

と言いました。

ところが画かきはもうすっかりよろこんで、手をぱちぱち叩(たた)いて、それからはねあがって言いました。
「おい君、行こう。林へ行こう。おれは柏の木大王のお客さまになって来ているんだ。おもしろいものを見せてやるぞ。」
画かきはにわかにまじめになって、赤だの白だのぐちゃぐちゃついた汚(きた)ない絵の具箱(ばこ)をかついで、さっさと林の中にはいりました。そこで清作も、鍬をもたないで手がひまなので、ぶらぶら振ってついて行きました。
林のなかは浅黄(あさぎ)いろで、肉桂(にっけい)のようなにおいがいっ

ぱいでした。ところが入口から三本目の若い柏の木は、ちょうど片脚(かたあし)をあげておどりのまねをはじめるところでしたが二人の来たのを見てまるでびっくりして、それからひどくはずかしがって、あげた片脚の膝(ひざ)を、間がわるそうにべろべろ嘗(な)めながら、横目でじっと二人の通りすぎるのをみていました。殊(こと)に清作が通り過ぎるときは、ちょっとあざ笑いました。清作はどうも仕方ないというような気がしてだまって画かきについて行きました。

　ところがどうも、どの木も画かきには機嫌(きげん)のいい顔をしますが、清作にはいやな顔を見せるのでした。

一本のごつごつした柏の木が、清作の通るとき、うすくらがりに、いきなり自分の脚をつき出して、つまずかせようとしましたが清作は、

「よっとしょ。」と云いながらそれをはね越えました。

画かきは、

「どうかしたかい。」といってちょっとふり向きましたが、またすぐ向うを向いてどんどんあるいて行きました。

ちょうどそのとき風が来ましたので、林中の柏の木はいっしょに、

「せらせらせら清作、せらせらせらばあ。」とうす気味

のわるい声を出して清作をおどそうとしました。

ところが清作は却(かえ)ってじぶんで口をすてきに大きくして横の方へまげて

「へらへらへら清作、へらへらへら、ばばあ。」とどなりつけましたので、柏の木はみんな度ぎもをぬかれてしいんとなってしまいました。画かきはあっはは、あっはははとびっこのような笑いかたをしました。

そして二人はずうっと木の間を通って、柏の木大王のところに来ました。

大王は大小とりまぜて十九本(じゅうく)の手と、一本の太い脚とをもって居(お)りました。まわりにはしっかりしたけら

いの柏どもが、まじめにたくさんがんばっています。
画かきは絵の具ばこをカタンとおろしました。すると大王はまがった腰(こし)をのばして、低い声で画かきに云いました。
「もうお帰りかの。待ってましたじゃ。そちらは新しい客人じゃな。が、その人はよしなされ。前科者じゃぞ。前科九十八犯(くじゅうはっぱん)じゃぞ。」
清作が怒ってどなりました。
「うそをつけ、前科者だと。おら正直だぞ。」
大王もごつごつの胸を張って怒りました。
「なにを。証拠はちゃんとあるじゃ。また帳面にも

載(の)っとるじゃ。貴(き)さまの悪い斧(おの)のあとのついた九十八の足さきがいまでもこの林の中にちゃんと残っているじゃ。」

「あっはっは。おかしなはなしだ。九十八の足さきというのは、九十八の切株(きりかぶ)だろう。それがどうしたというんだ。おれはちゃんと、山主の藤助(とうすけ)に酒を二升(しょう)買ってあるんだ。」

「そんならおれにはなぜ酒を買わんか。」

「買ういわれがない」

「いや、ある、沢山(たくさん)ある。買え」

「買ういわれがない」

画かきは顔をしかめて、しょんぼり立ってこの喧嘩(けんか)をきいていましたがこのとき、俄(にわ)かに林の木の間から、東の方を指さして叫(さけ)びました。

「おいおい、喧嘩はよせ。まん円い大将に笑われるぞ。」

見ると東のとっぷりとした青い山脈の上に、大きなやさしい桃(もも)いろの月がのぼったのでした。お月さまのちかくはうすい緑いろになって、柏(かしわ)の若い木はみな、まるで飛びあがるように両手をそっちへ出して叫びました。

「おつきさん、おつきさん、おっつきさん、

ついお見外（みそ）れして　すみません
あんまりおなりが　ちがうので
ついお見外れして　すみません。」

柏の木大王も白いひげをひねって、しばらくうむうむと云いながら、じっとお月さまを眺（なが）めてから、しずかに歌いだしました。

「こよいあなたは　ときいろの
むかしのきもの　つけなさる
かしわばやしの　このよいは
なつのおどりの　だいさんや

やがてあなたは　みずいろの
きょうのきものを　つけなさる
かしわばやしの　よろこびは
あなたのそらに　かかるまま。」

画かきがよろこんで手を叩きました。

「うまいうまい。よしよし。夏のおどりの第三夜。みんな順々にここに出て歌うんだ。じぶんの文句でじぶんのふしで歌うんだ。一等賞から九等（くとう）賞まではぼくが大きなメタルを書いて、明日（あした）枝（えだ）にぶらさげてやる。」

清作もすっかり浮（う）かれて云いました。

「さあ来い。へたな方の一等から九等までは、あした

おれがスポンと切って、こわいとこへ連れてってやるぞ。」

すると柏（かしわ）の木大王が怒りました。

「何を云うか。無礼者。」

「何が無礼だ。もう九本（くほん）切るだけは、とうに山主の藤助（とうすけ）に酒を買ってあるんだ。」

「そんならおれにはなぜ買わんか。」

「買ういわれがない。」

「いやある、沢山ある。」

「ない。」

画かきが顔をしかめて手をせわしく振（ふ）って云いまし

た。

「またはじまった。まあぼくがいいようにするから歌をはじめよう。だんだん星も出てきた。いいか、ぼくがうたうよ。賞品のうただよ。

一とうしょうは　白金メタル
二とうしょうは　きんいろメタル
三とうしょうは　すいぎんメタル
四とうしょうは　ニッケルメタル
五とうしょうは　とたんのメタル
六とうしょうは　にせがねメタル
七とうしょうは　なまりのメタル

八とうしょうは　ぶりきのメタル
九とうしょうは　マッチのメタル
十とうしょうから百とうしょうまで
あるやらないやらわからぬメタル。」

柏の木大王が機嫌を直してわははわははと笑いました。

柏の木どもは大王を正面に大きな環（わ）をつくりました。

お月さまは、いまちょうど、水いろの着ものと取りかえたところでしたから、そこらは浅い水の底のよう、木のかげはうすく網（あみ）になって地に落ちました。

画かきは、赤いしゃっぽもゆらゆら燃えて見え、まっ

すぐに立って手帳をもち鉛筆（えんぴつ）をなめました。

「さあ、早くはじめるんだ。早いのは点がいいよ。」

そこで小さな柏の木が、一本ひょいっと環のなかから飛びだして大王に礼をしました。

月のあかりがぱっと青くなりました。

「おまえのうたは題はなんだ。」画かきは尤（もっと）もらしく顔をしかめて云いました。

「馬と兎（うさ）です。」

「よし、はじめ、」画かきは手帳に書いて云いました。

「兎（うさぎ）のみみはなが……。」

「ちょっと待った。」画かきはとめました。「鉛筆が折

れたんだ。ちょっと削（けず）るうち待ってくれ。」

そして画かきはじぶんの右足の靴（くつ）をぬいでその中に鉛筆を削りはじめました。柏の木は、遠くからみな感心して、ひそひそ談（はな）し合いながら見て居りました。そこで大王もとうとう言いました。

「いや、客人、ありがとう。林をきたなくせまいとの、そのおこころざしはじつに辱（かたじ）けない。」

ところが画かきは平気で

「いいえ、あとでこのけずり屑（くず）で酢（す）をつくりますからな。」

と返事したものですからさすがの大王も、すこし工合（ぐあい）

が悪そうに横を向き、柏の木もみな興をさまし、月のあかりもなんだか白っぽくなりました。

ところが画かきは、削るのがすんで立ちあがり、愉快そうに、

「さあ、はじめて呉れ。」と云いました。

柏はざわめき、月光も青くすきとおり、大王も機嫌を直してふんふんと云いました。

若い木は胸をはってあたらしく歌いました。

「うさぎのみみはながいけど
うまのみみよりながくない。」

「わあ、うまいうまい。ああはは、ああはは。」みんな

はわらったりはやしたりしました。

「一とうしょう、白金メタル。」と画かきが手帳につけながら高く叫びました。

「ぼくのは狐のうたです。」

また一本の若い柏の木がでてきました。月光はすこし緑いろになりました。

「よろしいはじめっ。」

「きつね、こんこん、きつねのこ、月よにしっぽが燃えだした。」

「わあ、うまいうまい。わっはは、わっはは。」

「第二とうしょう、きんいろメタル。」

「こんどはぼくやります。ぼくのは猫（ねこ）のうたです。」

「よろしいはじめっ。」

「やまねこ、にゃあご、ごろごろ
さとねこ、たっこ、ごろごろ。」

「わぁ、うまいうまい。わっはは、わっはは。」

「第三とうしょう、水銀メタル。おい、みんな、大きいやつも出るんだよ。どうしてそんなにぐずぐずしてるんだ。」画かきが少し意地わるい顔つきをしました。

「わたしのはくるみの木のうたです。」

すこし大きな柏（かしわ）の木がはずかしそうに出てきました。

「よろしい、みんなしずかにするんだ。」
柏の木はうたいました。
「くるみはみどりのきんいろ、な、
風にふかれて　すいすいすい、
くるみはみどりの天狗（てんぐ）のおうぎ、
風にふかれて　ばらんばらんばらん、
くるみはみどりのきんいろ、な、
風にふかれて　さんさんさん。」
「いいテノールだねえ。うまいねえ、わあわあ。」
「第四（し）とうしょう、ニッケルメタル。」
「ぼくのはさるのこしかけです。」

「よし、はじめ。」
柏の木は手を腰にあてました。
「こざる、こざる、
おまえのこしかけぬれてるぞ、
霧、ぽっしゃん　ぽっしゃん　ぽっしゃん、
おまえのこしかけくされるぞ。」
「いいテノールだねえ、いいテノールだねえ、うまいねえ、うまいねえ、わあわあ。」
「第五とうしょう、とたんのメタル。」
「わたしのはしゃっぽのうたです。」それはあの入口から三ばん目の木でした。

「よろしい。はじめ。」

「うこんしゃっぽのカンカラカンのカアン

あかいしゃっぽのカンカラカンのカアン。」

「うまいうまい。すてきだ。わぁわぁ。」

「第六とうしょう、にせがねメタル。」

このときまで、しかたなくおとなしく聞いていた清作が、いきなり叫びだしました。

「なんだ、この歌にせものだぞ。さっきひとのうたったのまねしたんだぞ。」

「だまれ、無礼もの、その方などの口を出すところでない。」柏の木大王がぶりぶりぶりしてどなりました。

「なんだと、にせものだからにせものと云ったんだ。生意気いうと、あした斧をもってきて、片っぱしから伐ってしまうぞ。」

「なにを、こしゃくな。その方などの分際でない。」

「ばかを云え、おれはあした、山主の藤助にちゃんと二升酒を買ってくるんだ」

「そんならなぜおれには買わんか。」

「買ういわれがない。」

「買え。」

「いわれがない。」

「よせ、よせ、にせものだからにせがねのメタルをや

るんだ。あんまりそう喧嘩(けんか)するなよ。さあ、そのつぎはどうだ。出るんだ出るんだ。」

お月さまの光が青くすきとおってそこらは湖の底のようになりました。

「わたしのは清作のうたです。」

またひとりの若い頑丈(がんじょう)そうな柏の木が出ました。

「何だと、」清作が前へ出てなぐりつけようとしましたら画かきがとめました。

「まあ、待ちたまえ。君のうただって悪口(わるぐち)ともかぎらない。よろしい。はじめ。」

柏の木は足をぐらぐらしながらうたいました。

「清作は、一等卒の服を着て
野原に行って、ぶどうをたくさんとってきた。
と斯（こ）うだ。だれかあとをつづけてくれ。」
「ホウ、ホウ。」柏の木はみんなあらしのように、清作をひやかして叫びました。
「第七（しち）とうしょう、なまりのメダル。」
「わたしがあとをつけます。」さっきの木のとなりからすぐまた一本の柏の木がとびだしました。
「よろしい、はじめ。」
かしわの木はちらっと清作の方を見て、ちょっとばかにするようにわらいましたが、すぐまじめになって

うたいました。

「清作は、葡萄（ぶどう）をみんなしぼりあげ
砂糖を入れて
瓶（びん）にたくさんつめこんだ。
おい、だれかあとをつづけてくれ。」

「ホッホウ、ホッホウ、ホッホウ、」柏の木どもは風のような変な声をだして清作をひやかしました。

清作はもうとびだしてみんなかたっぱしからぶんなぐってやりたくてむずむずしましたが、画かきがちゃんと前へ立ちふさがっていますので、どうしても出られませんでした。

「第八等、ぶりきのメタル。」
「わたしがつぎをやります。」さっきのとなりから、また一本の柏の木がとびだしました。
「よし、はじめっ。」
「清作が　納屋（なや）にしまった葡萄酒は
　順序ただしく
　みんなはじけてなくなった。」
「わっはっは、わっはっはっは、ホッホウ、ホッホウ、ホッホウ。がやがやがやがや……。」
「やかましい。きさまら、なんだってひとの酒のことなどおぼえてやがるんだ。」清作が飛び出そうとしま

したら、画かきにしっかりつかまりました。
「第九(く)とうしょう。マッチのメタル。さあ、次だ、次だ、出るんだよ。どしどし出るんだ。」
　ところがみんなは、もうしんとしてしまって、ひとりもでるものがありませんでした。
「これはいかん。でろ、でろ、みんなでないといかん。でろ。」画かきはどなりましたが、もうどうしても誰(たれ)も出ませんでした。
　仕方なく画かきは、
「こんどはメタルのうんといいやつを出すぞ。早く出ろ。」と云いましたら、柏の木どもははじめてざわっと

しました。

そのとき林の奥の方で、さらさらさらさら音がして、

それから、

「のろづきおほん、のろづきおほん、

おほん、おほん、

ごぎのごぎのおほん、

おほん、おほん、」

とたくさんのふくろうどもが、お月さまのあかりに青じろくはねをひるがえしながら、するするするする出てきて、柏の木の頭の上や手の上、肩やむねにいちめんにとまりました。

立派な金モールをつけたふくろうの大将が、上手に音もたてないで飛んできて、柏の木大王の前に出ました。そのまっ赤な眼(め)のくまが、じつに奇体(きたい)に見えました。よほど年老(としよ)りらしいのでした。

「今晩は、大王どの、また高貴の客人がた、今晩はちょうどわれわれの方でも、飛び方と握(つか)み裂(さ)き術との大試験であったのじゃが、ただいまやっと終わりましたじゃ。

ついてはこれから連合(れんごう)で、大乱舞会(だいらんぶかい)をはじめてはどうじゃろう。あまりにもたえなるうたのしらべが、われらのまどいのなかにまで響(ひび)いて来たによって、この

ようにまかり出ましたのじゃ。」

「たえなるうたのしらべだと、畜生（ちくしょう）。」清作が叫（さけ）びました。

柏の木大王がきこえないふりをして大きくうなずきました。

「よろしゅうござる。しごく結構でござろう。いざ、早速とりはじめるといたそうか。」

「されば、」梟（ふくろう）の大将はみんなの方に向いてまるで黒砂糖のような甘（あま）ったるい声でうたいました。

「からすかんざえもんは

くろいあたまをくうらりくらり、

とんびとうざえもんは
あぶら一升（しょう）でとうろりとろり、
そのくらやみはふくろうの
いさみにいさむもののふが
みみずをつかむときなるぞ
ねとりを襲（おそ）うときなるぞ。」

ふくろうどもはもうみんなばかのようになってどなりました。

「のろづきおほん、
おほん、おほん、
ごぎのごぎおほん、

おほん、おほん。」

かしわの木大王が眉(まゆ)をひそめて云いました。

「どうもきみたちのうたは下等じゃ。君子(くんし)のきくべきものではない。」

ふくろうの大将はへんな顔をしてしまいました。すると赤と白の綬(じゅ)をかけたふくろうの副官が笑って云いました。

「まぁ、こんやはあんまり怒らないようにいたしましょう。うたもこんどは上等のをやりますから。みんな一しょにおどりましょう。さあ木の方(ほう)も鳥の方(ほう)も用意いいか。

おつきさんおつきさん　まんまるまるるるん
おほしさんおほしさん　ぴかりぴりるるん
かしわはかんかの　かんからからららん
ふくろはのろづき　おっほほほほほん。」

かしわの木は両手をあげてそりかえったり、頭や足をまるで天上に投げあげるようにしたり、一生けん命踊（おど）りました。それにあわせてふくろうどもは、さっさっと銀いろのはねを、ひらいたりとじたりしました。じつにそれがうまく合ったのでした。月の光は真珠（しんじゅ）のように、すこしおぼろになり、柏の木大王もよろこんですぐうたいました。

「雨はざあざあ　ざっざざざざざあ
風はどうどう　どっどどどどどう
あられぱらぱらぱらぱらったたあ
雨はざあざあ　ざっざざざざざあ」
「あっだめだ、霧（きり）が落ちてきた。」とふくろうの副官が高く叫びました。
なるほど月はもう青白い霧にかくされてしまってぼおっと円く見えるだけ、その霧はまるで矢のように林の中に降りてくるのでした。
柏（かしわ）の木はみんな度をうしなって、片脚（かたあし）をあげたり両手をそっちへのばしたり、眼をつりあげたりしたま

ま化石したようにつっ立ってしまいました。

冷たい霧がさっと清作の顔にかかりました。画(え)かきはもうどこへ行ったか赤いしゃっぽだけがほうり出してあって、自分はかげもかたちもありませんでした。

霧の中を飛ぶ術のまだできていないふくろうの、ばたばた遁(に)げて行く音がしました。

清作はそこで林を出ました。柏の木はみんな踊(おどり)ののままの形で残念そうに横眼で清作を見送りました。

林を出てから空を見ますと、さっきまでお月さまのあったあたりはやっとぼんやりあかるくて、そこを黒い犬のような形の雲がかけて行き、林のずうっと向う

の沼森のあたりから、
「赤いしゃっぽのカンカラカンのカアン。」と画かき
が力いっぱい叫んでいる声がかすかにきこえました。

底本：「注文の多い料理店」新潮文庫、新潮社
１９９０（平成２）年５月25日発行
１９９７（平成９）年５月10日17刷
初出：「イーハトヴ童話　注文の多い料理店」盛岡市杜陵出版部・東京光原社
１９２４（大正13）年12月１日
入力：土屋隆
校正：noriko saito
２００５年２月21日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫

（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。